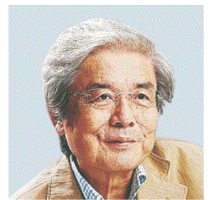


森里海に学ぶ

大正大と三陸の連帯

- 3 -



よつろう・たけしさん 1937年神奈川県鎌倉市生まれ、東大医学部卒。東大名誉教授。「日本に健全な森をつくり直す委員会」委員長。著書に「唯脳論」「バカの壁」。

●田はわれわれ

この世にあるものが、なにがの形でつながっている。それは当然のことである。

東大名誉教授 養老 孟司

「つながり」から考える

でも言葉を使うと、その関連が切れてしまう。たとえば私たちの体を考えてみる。手とか足とかいうが、どこまでが手で、どこからが胴体で、どこから足だろうか。

●空気も一部に

息をしなければ、死んでし

じつはへ理屈ではない。別の例を考えてみよう。田んぼで稲が育つて、そこに米が実つかの形をつなっている。そして、それを私たちが食べる。それは当然のことである。

●言葉が「切る」

まう。だから肺のなかには、いつでも空気が入っている。息をするから、肺のなかの空気はたえず入れ替わる。でもいつでも肺に空気が入っていることに変わりはない。

自分と環境のつながりが切れてしまふ。田んぼも空気も、じつは自分だともいえるのである。

森里海がつながっているのも、本来は当然というべきであらう。でも森は森、里は里、海は海で、それぞれ独立している。いまではそう考えてしまふ人が多いのではないだろうか。だから森里海連環学なのである。そういうものが、たがいにつながっている。それをうかつに切ってはいけない。少なくとも、自分がそれを切ったままにして、ものを考えている。それに気づいていただきたい。連環学にはそういう趣旨がこめられていると私は思う。

降りる時には、宇宙服を着なければならぬ。なぜか。空気が必要だからである。空気がなければ、ただちに死んでしまふ。肺にとって、空気はいつでも必要不可欠なからだから、それなら空気はわれわれの体の一部ではないの

大正大(東京)と河北新報社の連携事業として、同大が宮城県南三陸町などで行う出前講座、フィールド学習の内容を担当の講師に月1回報告してもらいます。